

- II-5 視線検出装置 (Gazefinder) を用いた ASD 早期診断の有用性の検討
 ○齊藤まなぶ¹⁾ 坂本由唯²⁾ 吉田和貴²⁾ 柞木田なつみ²⁾
 松原侑里²⁾ 吉田恵心³⁾ 足立匡基³⁾ 高橋芳雄³⁾ 安田小響³⁾
 栗林理人³⁾ 中村和彦²⁾³⁾
 (弘前大学医学部附属病院神経科精神科¹⁾
 弘前大学大学院医学研究科神経精神医学講座²⁾
 弘前大学医学部附属子どものこころの発達研究センター³⁾)

- II-6 当科における甲状腺乳頭癌治療の現状と課題
 ○西 隆、井川明子、西村顕正、袴田健一
 (弘前大学医学部附属病院 消化器・乳腺・甲状腺外科)

- III-7 ウイルス感染と胆道閉鎖症-CCL5の意義
 ○島田 拓^{1,2)}、木村 俊郎²⁾、早狩 亮¹⁾、松宮 朋穂¹⁾、
 吉田 秀見¹⁾、今泉 忠淳¹⁾、袴田 健一²⁾
 (弘前大学大学院医学研究科 脳血管病態学講座¹⁾、
 同 消化器外科学講座²⁾)

- III-8 バレーボールによる膝前十字靭帯損傷の受傷状況調査
 ○菊田祐希子¹⁾ 木村由佳¹⁾ 佐々木静¹⁾ 奈良岡琢哉¹⁾
 山本祐司¹⁾ 津田英一²⁾ 石橋恭之¹⁾
 (弘前大学大学院医学研究科 整形外科学講座¹⁾
 弘前大学大学院医学研究科 リハビリテーション医学講座²⁾)

【目的】膝前十字靭帯(ACL)損傷はスポーツ活動中での受傷が多く、競技毎に特徴的な受傷機転が報告されている。近年ではスポーツ復帰や術後再損傷などの問題点から損傷予防が注目されている。より効果的な予防プログラムを確立するうえで競技特異的な受傷機転を明らかにすることは重要である。本研究の目的はバレーボールによる ACL 損傷の特徴を調査することである。

【対象・方法】2010-2016年に当科で ACL 再建術を施行した 613 例中バレーボールにより受傷した 63 例を対象とした。調査が可能であったのは女性 43 例、男性 3 例の 46 例で平均年齢 26.3±11.8 歳、平均競技経験年数 10.7±8.9 年であった。自己記入式質問紙調査を用いて、ポジション、利き手側と受傷側、受傷状況(接触の有無、受傷時の動作、受傷時のプレー、受傷時のコート上の位置)について検討した。

【結果】ポジションはレフト 23 例、センター 9 例、ライト 8 例であった。非接触型が 41 例(89.1%)、非利き手側の受傷が 32 例(69.6%)であった。動作は着地での受傷が 36 例(78.3%)と最多であり、そのうち 32 例が片脚着地での受傷であった。スパイク時の受傷が 33 例(72%)、ブロック時の受傷が 6 例(13%)であった。ポジション別の受傷機転ではレフト選手がスパイク時の片脚着地での受傷が多く、センターの選手はブロック時の片脚着地での受傷がみられた。コート上の位置はアタックラインよりも前方のネット際が多かった。

【考察】バレーボールでの ACL 損傷は、エースポジションであるレフトの選手が、ネット際でスパイクの着地時に利き手と反対側の片脚着地で多く受傷していた。本調査結果から、アタッカー選手のスパイク着地動作に介入することで損傷予防につながる事が期待できる。現在行っているスパイク着地動作の 3 次元動作解析についても紹介する。